

多職種連携研修会の報告

1. グループワークの概要

認知症基本法の施行を踏まえ、認知症本人や家族、若年性認知症本人の声を取り入れて改訂した「認知症安心ガイド（ケアパス）」について、居宅介護支援事業所、地域包括支援センター、医療機関等の関係者を対象にグループワークを実施した。

新旧のケアパスを実際に見ていただき、内容やデザインについての感想、今後の活用方法等について意見交換を行い287件の意見をいただいた。

2. 主な意見

- ① 本人・家族の視点を取り入れた内容への評価
- ② デザイン・読みやすさの向上
- ③ 「認知症」というタイトル・表現の難しさ
- ④ 「誰に・いつ・どのように渡すか」という活用方法の課題
- ⑤ 「冊子は評価されているが、十分に活用されていない」という実態
- ⑥ 市民への周知・普及
- ⑦ 医療・相談・地域資源につなげるツールとしての期待

① 本人・家族の視点を取り入れた内容への評価

本人・家族の声や若年性認知症本人の声、具体的な事例を掲載したことについて、肯定的な意見が多くみられた。

「本人の想いが記載されていて、自分だけではないと思える」

「本人・家族の声があり、身近な問題として捉えやすい」

「事例がありイメージしやすい」

「Q&A 方式で分かりやすい」などの意見があった。

特に、知識や制度中心の内容から、本人・家族の立場や生活を意識した内容になったことが評価されている。また、若年性認知症についても、働き盛りの世代への影響が大きいことから、取り上げたことを評価する意見があった。

② デザイン・読みやすさの向上

新しいケアパスについて、「やさらかい」、「見やすい」、「手に取りやすい」という意見が多く、表紙や色使いの印象、文字の大きさ、イラストや Q&A を用いた構成が評価さ

れた。

一方で、「文字が多い」、「情報量が多く本人には難しいのではないか」という意見もあり、本人・家族にとっての必要な情報量と、読みやすさのバランスが課題であることが分かった。

③ 「認知症」というタイトル・表現の難しさ

「認知症」という言葉が、本人に冊子を渡す際の心理的なハードルになるという意見が多くみられた。

「認知症と書いてあると本人に渡しづらい」

「認知症と認めたくない人には渡しにくい」

「自覚していない人には渡せない」などの意見があった。

一方で、「認知症かもと思ったら」など、本人が受け入れやすく、安心感や前向きな印象を与えるタイトル・表現を検討してはどうかという提案もあった。

④ 「誰に・いつ・どのように渡すか」という活用方法の課題

「良い冊子だが、いつ渡せばよいのか分からない」という意見が多く、対象者や活用するタイミングが明確になっていないことが課題として挙げられた。

「本人と家族のどちらに渡すのか」

「相談時・受診時など、どの段階で活用するのか」といった意見がある一方、

「初回相談時」、「物忘れが気になった段階」、「家族への説明時」など、早期の相談や受診につなげるツールとして活用できるとの意見もあった。

⑤ 評価は高いが、十分に活用されていない

「知っていたが使ったことがない」

「これまで活用できていなかった」

「冊子の存在を知らなかった」など、

冊子の評価と実際の活用には差があることが分かった。

また、「事業所に1冊しかない」「利用者に渡せる部数がない」といった意見もあり、今後は、配布方法や活用場面の明確化、専門職への周知、必要部数の確保などが必要と考えられる。

⑥ 市民への周知・普及

「病院の待合室やサロン、百歳体操などに置いてほしい」

「市民向けの催しで紹介してはどうか」

「市民だより等に同封してはどうか」など

より多くの市民が目にする機会を増やしてほしいという意見があった。

また、40～50代など、認知症になる前の世代にも知ってほしいという意見があり、本人・家族だけでなく、認知症になる前から地域住民が認知症について知るためのツールとして活用することが期待されている。

⑦ 医療・相談・地域資源につなげるツールとしての期待

受診先や相談先、利用できるサービスが掲載されていることについて、「紹介しやすい」、「家族への説明に使える」、「相談先が分かる」と評価された。一方で、「最初にどこへ相談すればよいか分かりやすくしてほしい」「もの忘れ外来と専門医療機関の違いが分からない」など、次の行動につながる情報をより分かりやすくしてほしいという意見もあった。

また、認知症カフェ、認知症支援隊、お願いカード等についても、ケアパスと併せて周知してほしいという意見があり、ケアパスを単なる情報冊子ではなく、医療・介護・地域の支援につながる入口として活用したいという期待がみられた。

3. 意見から見えた共通テーマ

今回の意見を総合すると、新しいケアパスについては、「本人・家族の声を取り入れ、よりやわらかく、手に取りやすい冊子になった」という評価が得られている。一方で、「誰に、いつ、どのように渡すのか」が明確でなく、冊子の存在を知っていても十分に活用できていないという課題が明らかになった。

特に、「認知症」という言葉を本人にどう届けるかについては、内容の充実だけでは解決できない重要な課題であり、冊子の内容・タイトル・渡し方を一体的に考える必要性が示された。

今後は認知症になった本人・家族だけを対象とするのではなく、認知症になる前の世代を含め、地域住民が早い段階から認知症について知り、必要な時に相談や支援につながるためのツールとして活用することが期待されている。